

私の一冊

社会福祉学科 奥田都子 先生

エリザベート・バダンテール著 『母性という神話』

小鹿図書館 : 367.3/B 14 (ちくま学芸文庫)

私が本書に出会ったのは四半世紀前の大学院在学中のことでした。近代日本の家族観がどのように形成されたのかをたどる過程で、欧米の家族史研究に学ぶところがあり、他学科の家族史の演習に飛び入り参加したときに、最初に読むように呈示されたのが本書だったので。本書が最初に訳出されたときの題名は、『プラス・ラブ』というタイトルでした。のちに改題されて現在の題名になったのですが、はじめてこのタイトルを見たときは、近代以降の家族の愛情や情緒機能の高まりについての論考なのだろうと勝手に想像していましたが、その想像は見事に裏切られました。本書は、「母性愛は本能ではない」という挑戦的なテーゼを掲げた衝撃の書であり、ヨーロッパ、とりわけフランスの家族の歴史から、今日の目で見ると「母親らしくない」とされる行動が一般的に広く行われていた事実を指摘し、「普遍的な母性愛の存在」を疑わせる数々の証拠によって、母性愛が本能ではないこと、母性本能は神話に過ぎないことを論証した、実に興味深い一冊だったのです。

その指摘する驚くべき歴史的事実を引用してみましょう。1780年、パリ警察長官からハンガリー女王に送られた国勢報告の記述です。首都パリで1年間に生まれる2万1000人のこどものうち、上流階級に生まれ住み込みの乳母に育てられるものが1000人。生みの母親に育てられるものは1000人にみたく、大多数を占める1万9000人は、母親のもとから手放され、パリ近郊や遠くの農村に里子に出されていたというのです。パリ以外の大都市でも同様の里子慣習が記録されており、今日からすると信じがたいことですが、大多数の親は子どもを平気で里子に出し、事実上の育児放棄をしていたにもかかわらず、そのことを非難されることもなかったというのです。本書では、親の多くは里子に出した子どもの安否を頻繁に確認することもなく、子どもが病気や怪我によって障害を負ったり亡くなったりすることも少なくなかったこと、大きくなって親元に戻った子どもが健康体でないことを知ってもなお、次々に生まれる子どもを里子に出すことをやめなかったことなども指摘され、母親の子どもに対する関心の希薄さ、愛情の希薄さなどが、これでもか、これでもかというほどに紹介されています。あまりにも、こんにち私たちが母親に期待する態度とはかけ離れた姿に、読み手は衝撃を受けずにはいられないでしょう。それとともに、いったいなぜ、近代以前にこれほど「母性的でなかった母親」たちが、たか

だか 200 年ほどの間に今日のような母性行動を獲得し、母性神話が成立するに至ったのか、不思議に思うのではないのでしょうか。

子どもへのまなざしの変化と母親の行動変容について、著者はさらに興味深い分析と解釈を行っていますので、母性神話について関心のある方はもちろん、子どもを虐待したり愛せない母親の心理に関心のある方には本書を一読されることをお勧めします。私自身は、本書に出会ったおかげで、「子どもを可愛く思えない母親&父親」や「子どもより自分が大切な母親&父親」が世の中に少なからず存在することを直視できるようになり、安易に母親失格のレッテルを貼らず、理解しようとする姿勢を育むことができました。自分自身の子育てにおいても、母性神話の束縛に苦しむことが少なかったように思います。「母親はどうあるべきか」を社会が規定し、その規定に母親も父親も縛られていることに気づかせてくれる貴重な一冊です。これから親になっていく若い世代の方々や、子育てを援助する仕事に就く方々には、男女問わず、ぜひ読んでいただければと思います。ちなみに、宇多田ヒカルさんも、ブログの中で本書を読んでいることに触れていましたよ。